

忌避剤を用いたカモシカ・シカの造林木被害の防除

表 年度別の獣類による林産物被害額

1987～1991年

(単位：万円)

種類 \ 年度	1987年	1988年	1989年	1990年	1991年
カモシカ	63,599	61,782	57,747	58,390	55,731
シカ	4,814	5,774	21,175	196,060	13,692
サル	6,856	7,763	8,082	12,511	11,445
ノウサギ	17,654	29,527	20,690	11,990	10,799
イノシシ	1,883	3,722	3,758	4,911	1,187

(長野県林業統計書による)

1. はじめに

近年、林産物への動物の被害が増加しており、特にカモシカ、シカによる造林木の食害を含めた被害は、表に示すように被害額の1、2位を占め大きな問題になっています。今回は、このカモシカ、シカによる造林木被害の対策として最も新しい忌避剤を用いた防除法について紹介します。

2. カモシカ、シカによる被害

カモシカ、シカの造林木被害は、繰り返し同じ場所で発生するのが特徴です。ここでは、その被害の形態を説明します。

(1) 加害樹種

ヒノキ、スギ、カラマツ、アカマツなどの主要造林樹種その他、ミズナラ、モミ、イチイ、ツガなども食害されます。

(2) 加害場所

カモシカ、シカの生息地の森林伐採を契機にして、林床植物が飛躍的に増加して餌条件が良くなった造林地で被害が発生します。またシカ道に接している造林木は、被害がひどい傾向があります。

(3) 加害形態

① 葉および枝の食害 (カモシカ、シカ)

葉や枝の食べ方は、先端を含めた枝葉をかねて引きちぎるように食べ、その切断面は不揃いになります。(写真-1) また繰り返し



写真-1 カモシカに葉および枝を食害されたヒノキ

食害を受けた造林木は、矮小化し盆栽状になります。(写真-2)

被害林齢は、植栽直後～5年生くらいの造林木が被害を受け易く、樹高1.8mより高くなってくると被害は減少します。

② 樹皮の食害 (シカ)

樹皮の食べ方は、樹皮を歯でかじり取るか、かねてひきちぎって食べ、幹にはノミでえぐったような歯跡が付きまします。食害がひどい場合



写真-2 カモシカに食害されて盆栽状になったヒノキ

は、巻き込みに相当の時間を要する傷を幹に残したり、巻き枯らし状態で枯損させるケースもあります。(写真-3)

被害林齢は、4～5年生頃から目立ちはじめ、若齢木から壮齢木まで被害の発生が確認されています。

③ その他の被害 (カモシカ、シカ)

その他の被害には、幹の角こすりによる剥皮、造林木の踏み倒しなどがあります。角こすりによる剥皮は、ナワバリ維持のためのマーキング行動で、特に発情期の秋に多くみられます。

④ 被害発生時期

カモシカの被害は晩秋や、雪解け後に多く発生します。シカの被害は餌条件によって変わりますが、ほぼ年間を通じて発生します。

3 加害動物の判別方法

効果的な防除を行うには、造林木を食害した動物を判別することが必要です。判別のポイントをいくつか上げましたので参考にしてください。

- ① 枝や幹の先端の切断面が鎌で切断したように鋭利である。……………ノウサギ

- ② 枝や幹の先端の切断面が不揃いである。

……………カモシカ、シカ

- ③ 樹皮を食害されている幹の部分が根元から約50～70cm程度までである。……………ノウサギ

- ④ 樹皮を食害されている幹の部分が根元から約150cm程度まで達している。……………シカ
またカモシカ、シカの判別は、枝葉の食害痕はよく似ているので判別が難しく、樹皮の食害があるかどうかのポイントになります。

なお、壮齢木で樹皮が剥皮されているものには、シカ、クマによるものがあります。クマの剥皮は、高さが根元から約2～3mに達していて、剥かれた樹皮が離れずに残っていることが多いのが特徴です。

4. 忌避剤によるカモシカ、シカの防除方法

現在カモシカ、シカの造林木被害を防除する忌避剤には次のようなものがあります。

(1) チウラム塗布剤 (ヤシマレント)

この薬剤は、動物忌避剤のチウラム剤と、羊の毛からとれるラノリンという脂とオリーブ油を混合したクリーム状のカモシカ、ノウサギ・



写真-3 シカに樹皮を食害されたアカマツ

シカ用忌避剤です。この薬剤は、造林木の葉、枝および幹にそのまま塗布して約3～4ヶ月程度食害を防除できます。この忌避効果は、主に味覚によるもので、造林木は多少かじられますが生育には支障がない程度です。

－手順は次のとおりです。－

- ① 薬剤の入ったプラスチック容器を腰のベルトなどに固定し、容器内の薬剤をよく攪拌して均一な状態にします。
- ② ゴム手袋をし、その上に軍手をつけて、指に薬剤を軽く取り、他の指や手にも十分に擦りつけます。
- ③ 薬剤をつけた手で、造林木の根元の方から軽くしごきあげて梢頭部分の枝葉と幹を重点に塗布します。造林木1本当りの薬剤量は0.8～1.5gくらいを目安とし、葉の繁茂ぐあいで加減します。
- ④ 使用上の注意としては、この薬剤は、ラノリンという脂が主成分の一つなので、頂芽や新芽が伸びてきた時に薬剤をつけると呼吸障害のため葉害を起こすことがあるので、頂芽や新芽の伸びて葉が固まっていない部分にはつけないように気をつけて塗布してください。

(2) ジラム水和剤 (コニファー水和剤)

この薬剤は、リンゴなどの殺菌剤として利用されるジラム剤が主成分の、カモシカ、シカ、ノウサギ用の忌避剤です。この薬剤は、造林木に散布することで約3～4ヶ月食害を防除できます。またこの薬剤も味覚による忌避効果のため多少はかじられますが、生育に支障がない程度です。

－手順は次のとおりです。－

- ① 薬剤を、水で3～5倍に薄めます。
- ② 薄めた薬剤を噴霧器を使用して、カモシカの場合は、梢頭部分を重点に散布します。またシカの場合は、梢頭部分と主幹の両方に散布します。
- ③ 薬剤は、散布後約3時間ほどで乾燥し、枝葉や幹にしっかり付着します。
- ④ 使用上の注意としては、この薬剤は水和剤なので、散布直後に降雨にあうと効果が減少

するので、天候に注意して散布してください。またヒノキの葉面に連続散布したり、真夏に散布すると呼吸障害を生じて葉害が出ることがあります。

なお、両剤ともに薬剤塗布、または散布後に伸びた部分は食害をうけますので再度防除対策を行う必要があります。またこれらの薬剤は、魚毒性があるので、使用した薬剤容器の廃棄や散布器具の洗浄は、必ず持ち帰ってから行ってください。

5. おわりに

忌避剤について説明しましたが、現在も新しい忌避剤の開発が進んでおり、根元に薬剤をまいて、造林木に吸収させ忌避効果を持たせるという新しいタイプの薬剤の研究もされており、より使いやすい忌避剤が開発されることが期待されます。

育林部 岡田